

郷土史伝承



伝統、文化、産業、民俗、自然……

郷土史に目を向けると、普段あまり気に留めてこなかった身近な地域のことを再発見することができます。郷土史には、自分の生まれ育ったまちに誇りを持ち、「ふるさと船橋」を愛してほしいというメッセージが込められています。

ひとつ知ると、あれもこれも知りたくなる。船橋の今と昔をつなぐ郷土史は、そんな魅力にあふれています。





聞いてなるほど

地名の由来

地名は、土地と人々のかかわりを伝える

「もの言わぬ文化財」。

地名の由来をたどると、

その土地の地形や自然現象、

出来事、伝説、ゆかりの人物など

様々な郷土史が見えてきます。

どこかで聞いたことのあるいわれが

あるかもしれません。

全部知っていたらかなりの船橋通です。



市名

船橋

古代、海老川は、現在より川幅が広く、水量も多かったため、橋を渡すのが困難だったそうです。そこで、川に小さな舟を数珠つなぎに並べて上に板を渡し、橋の代わりにしたことから「船橋」という名がつけました。

江戸時代には、海老川を挟んで東側では5の日、西側では9の日に市が開かれたことから、それぞれ、五日市村（現宮本）、九日市村（現本町・湊町）と呼ばれていました。この二つに海神村（現在はかいじんと読む）を加えたところを総称して、船橋村とか、船橋宿と言われていました。その地域が明治22年に船橋町となりました。



欄干に「船橋地名発祥の地」と印された海老川橋（別名「長寿の橋」）

西部地区

本中山

昭和42年に住居表示が実施されるまでは、「小栗原」という町名でした。新町名を設定する際に、市が地域住民と協議したところ、この地区は市内で最も東京に近いので近代的な町名をつけるべきだという声が高まりました。そこで、発展の目覚ましい下総中山駅の駅名にルーツを求め、新町名は「中山」にしようという案が出ました。

しかし、中山という町名は隣の市川市に既にあったので、再度協議を重ねたところ、「中山」はもともと船橋にあった地名だったことから「本中の中山」という意味を含め「本中山」という町名に落ち着きました。

藤原

藤原の由来については、剣豪宮本武蔵と結びつける説があります。奥羽を巡って常陸路を江戸へ向かう武蔵が、この地で父を亡くした少年伊織とめぐり会って、荒野を開拓。そしてこの土地に本姓名である藤原玄信に因んで藤原新田と名付けたというものです。しかし、



武蔵が修行したという藤原堂

この説は、行徳（市川市）周辺に伝わる武蔵伝説と吉川英治氏の小説『宮本武蔵』の内容が混同したもので信憑性は低いと考えられます。

この地の開拓は、行徳周辺から移住した者達を中心となって行われました。その草分けであった鈴木政右衛門という人が、検地を受けるために鈴木家の旧姓である藤原からとって藤原新田と名付けたという説が妥当であろうと考えられています。

丸山

丸山の地名は、馬込沢のあたりから見ると、丸い山のように見えるので付けられました。



上空から見た丸山の全景（昭和37年）。右下が馬込沢駅

地図を見ると、丸山は鎌ヶ谷市の中に飛び地となっているのがわかります。そのいきさつは江戸時代までさかのぼります。江戸時代初期、丸山は草原と林の台地で、やがて開墾され、延宝年間丸山新田となりました。一方、丸山の台地を囲む水田地帯は道野辺といい、起源がはっきりしないほど古くからある村でした。時は移り明治22年、いくつかの村を統合して新しい町村を作った時、丸山は新田成立の時からつながらりのある上山、藤原と同じ法典村となり、昭和12年に船橋市の一画となりました。道野辺は鎌ヶ谷村に入り、やがて市へと発展しました。

東部地区

みやま
三山

三山にある二宮神社は、当地方有数の古社で、その森は水の聖地を囲むと言われています。森を敬い「神の御山」と呼んだことが転じて「三山」となったという説が、語源として有力です。

この地で有名なのは「三山七年祭」。これは室町時代に始まり丑年と未年に執り行われる大祭で、近隣各市の9つの神社から二宮神社を目指してみこしが繰り出されます。



平成15年に行われた七年祭

やくえんだい
薬園台

8代將軍吉宗の時代、この地に幕府直轄の薬草園が開かれたことから名付けられました。薬草園では、朝鮮人参、黄連などが栽培されていたものと想定されていますが、詳しいことは殆ど分かっていません。

昭和48年に住居表示が実施されましたが、駅名や学校名に旧名が残っています。

はさまちょう
飯山満町

「いいやまみつる」と人名のように間違えられることもあり、難読地名の一つにあげられます。

その由来は、この地が山や台地の間に位置していたことにあります。そのような地形を意味する「はさま」に米（飯）が山のようにたくさんとれるようにとの願いを込めて、当て字にしたのではないかという説が有力です。

ならしの
習志野

明治6年、この辺りの旧陸軍駐屯地で明治天皇の統監のもと、近衛兵の演習が行われました。その後、この演習地を「習志野ノ原」とする勅命が出されました。

「習志野」の由来は、軍隊の操練



習志野演習場の様子（大正4年）

（習し）をする野という意味で付けられたと言われますが、一説では、演習の指揮ぶりが見事だった篠原少将に習え（篠原に習え）という意味で付けられたとも言われています。演習場の一部は現在、陸上自衛隊習志野駐屯地となっています。

北部地区

ふたわがし ふたわにし みさき
二和東・二和西・三咲

江戸時代、この辺りは幕府の広大な野馬放牧場でした。明治時代に入ると、失業者対策としてこの馬牧場を開墾する政策が政府によって打ち出されました。

開墾地には入植した順に初富以下

の地名が付けられました。このため、千葉県西部には、数字や佳字を組み合わせた地名があります。

※（ ）内は現在の市町村域
初富（鎌ヶ谷市）、二和・三咲（船橋市）、豊四季（柏市）、五香・六実（松戸市）、七栄（富里市）、八街（八街市）、九美上（佐倉市）、十倉（富里市）、十倉一（白井市）、十倉二（柏市）、十倉三（成田市・多古町）

しかし、開墾が始まったものの、水の便や地質が悪いなど、入植者の生活は過酷で、4年もたたないうちに入植者の4分の1以上が開墾地を去りました。二和・三咲地区では、わずかに残った人と周辺の村から移住した人の頑張りで、今日まで続く畑作地帯が築かれたということです。二和地区は、昭和56年に住居表示が実施された際に、町域が東と西に分けられました。



昭和43年に行われた二和開墾百年祭

鈴身町 すずみちやう

鈴身町は以前「行々林」おとろぼやしという地名でした。昔は草木がよく茂った所で、行けども行けども林が続き、「これは驚いた」という話から付いたと言われていますが、うっそうとした林がおどろおどろしいことから付いたという説が有力です。「おどろ」に「行々」の字を当てたのは「ぎょうぎよう」が驚く、あるいはおどろおどろにふさわしいと考えたからです。

昭和30年に豊富村が船橋市に合併する際に、鎮守の鈴身神社にちなんで「鈴身町」と改められました。



昭和47年の鈴身町。のどかな風景は今も残されています

古和釜 こわかま

「古和」についてはこの地の先祖が奈良県大和の古和の出身だからつ

いたという口伝があります。「釜」は穴、くぼ地の意味で、この地の小字の三つまたにあるくぼ地の地形がそれに当てはまります。これらを組み合わせると町名が生まれたと言われています。

町は伊勢神宮の神領や千葉氏の領地となったこともあると伝えられています。江戸末期は幕府の天領と松平氏の領地で村高一八石でした。

中部地区

高根町 たかねちやう

この地が周辺地域の中で最も高台に位置していたことから「高嶺」と呼ばれ、それが転じて高根となったとする説があります。船橋大神宮所蔵の古文書の中に「たかね郷」とあるのがこの地名が書かれた最古の文献であると言われています。

昭和48年の住居表示の実施に伴い、町域の3分の1強が高根台、緑台、新高根、芝山、金杉に分離しました。

夏見 なつみ

昔、船橋大神宮がこの地にあったころは、前面が海岸となっており、そこに磯菜がたくさん生えていたそうです。それを里人が摘んで同神社



中央消防署夏見分署から船橋駅方面を望む（昭和34年）

へ供えたので「菜摘みの里」といわれ、それがなまって「夏見」になったという説があります。

また、景行天皇がこの地を訪れた際に、菜摘みをしていた里人に地名を尋ねたところ、里人は都の言葉がわからず、今菜を摘んでいるという意味で「なつみ」と答えたことから「夏見」という地名になったという伝説もあります。

南部地区

海神 かいじん

海神の由来については次のような伝説があります。

日本武尊がこの地に賊徒平定に

やって来たときに、海上に光り輝く舟があり、近づいてみると柱に神鏡がかかっていた。それを浜に持ち帰って祀った場所が海神である。

ただし、これはあくまでも伝説です。この地の神社には、昔から海の神を祀っていたことから、それが自然と地名になったと考えられます。

日の出 ひのひで

日の出は昭和35年に公有水面埋め立て事業によって誕生しました。当時は、この埋め立て地の東側一帯をはじめ習志野、千葉両市の海面が埋め立てていなかったため、この地から海面の上に昇る朝日がよく見えました。このため、威勢がよい上に、工業地域の発展を象徴している、という理由から「日の出」が地名となりました。



昭和43年の日の出町。右にあるのは湊中学校



海老川を渡るS L (昭和40年代)



船橋市内を縦横無尽に走る9本もの
 鉄道路線。市民生活や都市機能を支え、
 船橋市はもとより首都圏の主要なルー
 トとして発展してきました。
 しかし、その歴史や謎については意
 外と知られていません。地域の鉄道の
 成り立ちを探ることで、船橋市の歴史
 を違う角度から見ることができます。

縦横無尽の鉄道網

その歴史を紐解く

郷土史伝承 ②



千葉県初の鉄道路線

明治21年に総武鉄道会社が創立。27年7月に市川〜佐倉間が千葉県内で最初の鉄道路線として開通しました。当初の駅は、市川・船橋・千葉・佐倉の4駅。船橋駅が設置されたことから、船橋が当時から交通の要衝であったことがわかります。

千葉県の鉄道開発は、関東でも遅れていました。それは「千葉県は四方を海と川に囲まれて、水上交通が発達しているので鉄道は不要」という認識があったからです。そこで総武鉄道は、当時主流であった利根水運との競合を避けるため、市川〜佐倉間の路線を計画しました。またこのルートは、陸軍駐屯地付近を通過し軍事的にも有益との判断から軌道敷設の許可が下り、開通に至りました。

宿場町から商業都市へ

明治30年になると、銚子までの全線が開通し、さらに佐倉で成田鉄道との連絡が実現しました。これにより成田に参拝する人が、人力車や馬車ではなく汽車を利用するようになり、成田街道最大の宿場町として栄えていた船橋から宿泊客が激減しました。

こうして、船橋は一時かなりさびれてしまいましたが、それまでも有していた地方商業都市としての機能を充実させることで、間もなく苦境を乗りき

JR東日本 総武線

りました。

東京のベッドタウン化の始まり

その後、明治40年に国防的見地から国有化されました。同時に施設の近代化も進み、41年に両国〜千葉間の複線化が完成。それに加えて、電化工事も進み、昭和10年に千葉までが電化されました。スピードアップと運転本数の増加が実現したことにより、職場は東京で、家は船橋という現在に続く東京のベッドタウン化が始まり、船橋に人口の増加をもたらしました。

戦後も県内で群を抜いた輸送力をもつ路線として発展を続けました。昭和62年からはJR東日本となり現在に至っています。



昭和43年の国鉄船橋駅南口

船橋海岸はおおにぎわい

京成電鉄はその名が示すとおり東京と成田を結ぶ成田山詣での路線として計画され、明治42年に京成電気軌道として創立しました（昭和20年に社名を京成電鉄に変更）。

大正元年に押上〜江戸川間と曲金（現京成高砂）〜柴又間が開通。大正5年に船橋へ開通したことにより、京成線の利用客は飛躍的に増加しました。京成線は、本数が多く、運賃も国鉄より安かったため、千葉方面の住民からも延長の要請が多く寄せられました。そして、当初の成田までの路線計画を後回しにして、千葉線を優先し、大正10年に京成船橋〜京成千葉間が開通しました。成田への開通は、大正15年でした。

京成線は総武線より海側を走っているため、開通によって東京の下町からの潮干狩り客や海水浴客が増え、船橋海岸は行楽地としてにぎわうようになりました。

船橋駅付近で

カーブが多い理由は？

軌道敷設の申請時は、京成船橋駅は総武鉄道船橋駅（現JR船橋駅）の北側にできる予定でしたが、市街地の中心を外れてしまったため、現在のルートに変更されました。

また、京成船橋駅以東は、船橋市街をまっすぐ東に進む予定でし

京成電鉄 京成本線



昭和初期の京成船橋駅

たが、地元住民からの反対があり、海老川沿いの水田地帯を急カーブしながら通過することとなりました。極端なS字カーブの線路は、これらが原因となっています。

23年の歳月を経て

高架化が実現

昭和58年度より海神駅〜船橋競馬場駅間の立体交差化事業が進められ、平成18年に上下線ともに高架線による運行を開始しました。これにより、長い間、人や車の流れを遮り、船橋名物と言われた16ヶ所の「開かずの踏切」がなくなりました。今後、高架脇に側道が整備され、市街地の更なる活性化が図られます。

東武鉄道 野田線

船橋〜大宮間を結ぶ東京の外環状線

野田線は、野田から国鉄常磐線柏へ連絡する県営鉄道として開業しました。

東武鉄道の前身北総鉄道（現在の北総鉄道（株）とは別会社）は東葛地域の公益事業の整備促進のために大正11年に創立。12年に柏〜野田間を県から払い下げ営業を開始し、同年に船橋〜柏間も開通しました。当初は全線が汽車で、船橋〜柏間を1日5往復、片道1時間をかけて運行していました。

昭和4年に路線が大宮まで延びたことから、社名を総武鉄道（総武本線を敷設した総武鉄道とは無関係）に改称。さらに、昭和19年に国策により東武鉄道に合併されました。

野田線の開通により、東葛内陸部から船橋への人の流れが生まれ、船橋に活気をもたらし要因のひとつとなりました。



昭和37年の馬込沢駅

船橋〜海神間に路線が存在した!?

大正14年に北総鉄道船橋駅と京成電気軌道海神駅の間で貨物線が敷設されました。京成電気軌道との直接連絡を図るため、昭和4年に旅客輸送を開始しましたが、利用客が少なかつたことなどから昭和9年に廃止されました。現在は道路となっています。

下総台地のパイオニア

新京成電鉄は、千葉県西北部の沿線開発を目的に、旧日本陸軍鉄道連隊から線路の払い下げを受けて昭和21年に設立。昭和30年に新津田沼〜松戸までの全線が開通しました。

昭和30年代に、前原団地、高根台団地などが次々と造成されると、沿線の急激な都市化が進みました。これにより、複線化や車両増加などの設備強化が進み、開通当初に見られた田園の中を1両の木造電車が走る景観は、この時期に変貌しました。

新京成電鉄 新京成線

曲がりくねった線路

新京成線を地図で見ると、ぐねぐねと曲がっているのかわかります。

これは、旧日本陸軍鉄道連隊が演習のために線路を敷設する際に、ある一定の距離以上の路線を敷かなければならないという規定に沿うよう、故意に路線を蛇行させ距離を確保したことが原因となっています。

ちなみに、新津田沼〜松戸間を直線距離で結べば15・8 kmですが、路線の距離は26・5 kmあります。



前原東を走る新京成（昭和33年）



昭和55年の小室駅

千葉ニュータウン構想を受け

昭和41年に千葉県によって千葉ニュータウン構想が発表されたことを受け、都営浅草線を延伸し、京成高砂〜小室までの新ルートが計画されました。

京成電鉄、千葉県、住宅・都市整備公団（現都市再生機構）等が出資し、昭和47年に北総開発鉄道（株）が設立。昭和54年に、北初富〜小室間で開業しました。平成3年に京成高砂まで開通すると、都営浅草線と京浜急行線への乗り入れが始まり、都心への直結が

北総鉄道 北総線

実現しました。平成12年には京成高砂〜印旛日本医大間の現在の路線が開通しています。

小室地区の風景が一変

北総線の開通とともに、千葉ニュータウンの先陣を切つて小室地区の売り出しが始まりました。当時の募集チラシには「ダイナミックな新交通体系」という見出しが見られ、都心へのアクセスの良さを強調しています。

開発が進むと、一面に広がっていた田園風景が、市街地へと急速に変貌しました。

東京メトロ 東西線

都心への
新たな足として

東西線は、昭和39年に高田馬場〜九段下間で開業しました。総武線の混雑緩和と都心への時間短縮を目的に昭和44年に西船橋駅までの延長が実現しました。ちなみに「地下鉄」とは言うものの、船橋市内の線路は全て地上を走っています。



西船橋駅で行われた開通式(昭和44年)

貨物専用線として計画

武蔵野線は、当初、貨物列車が都心を走らないで通過できるように貨物専用線として計画されたものでしたが、沿線の開発に伴って旅客事業も行うように計画が変更されました。

昭和48年に府中本町〜新松戸間で開業。小金線として建設されていた新松戸〜西船橋間も昭和53年に武蔵野線として開業しました。総距離71・8 kmで全線を通じて踏切はありません。

船橋法典駅は、JRA中山競馬場への最寄り駅であることから、西船橋よりに競馬場のための専用改札口があります。

現在の船橋法典駅



JR東日本 武蔵野線

環境と安全に配慮

千葉県・船橋市・八千代市・私鉄などが共同出資して、昭和56年に設立。平成8年に西船橋〜東葉勝田台間が市内9番目の鉄道として開業しました。東葉勝田台駅から八千代市・船橋市の中央部を東西に横断し、東西線を経由して都心までダイレクトに結んでいます。

東葉勝田台駅から西船橋駅まで全長16・2 km、全駅に車いす対応のエスカレーターや

JR東日本 京葉線



現在の南船橋駅周辺

ウォーターフロント計画

京葉線は、当初、川崎市塩浜〜品川埠頭〜西船橋〜蘇我間を結ぶ105 kmの臨海貨物路線として計画されました。その後、京葉線沿線が東京湾のウォーターフロント計画区域となり、旅客輸送が計画に追加されました。

昭和61年に西船橋〜千葉みなと間で開業。昭和63年には蘇我まで、平成2年には東京まで開通しました。東京から千葉(蘇我)まで総武線のバイパス的な役割を果たす路線となっています。南船橋駅周辺は、大型商業施設が立ち並び、関東を代表するショッピングゾーンとなっています。

東葉高速鉄道 東葉高速線

関東の駅百選

トイレが設置されるなどバリアフリーを重んじた、環境と安全に配慮した鉄道です。

船橋日大前駅は平成9年に関東の駅百選に選ばれています。日本大学理工学部の教授と学生がデザインし、学園都市にふさわしい、柱がなく未だ空間を構成している点が評価されました。現在この駅を中心に大規模な区画整理事業が行われ、環境共生型の新しい街が誕生しました。



斬新なデザインの船橋日大前駅(平成8年)

船橋 いにしへの街道を行く

船橋は江戸時代から何本もの街道が通る
交通の要所だった

旅人が遠くの目的地を目指し、通った街道——
憩いを求める人、それをもてなす人
そこは、人と人との出会いにあふれ
ふれあいの心が息づいていた



郷土史伝承 ③



成田街道 (国道296号)

江戸時代は正式には「佐倉道」でしたが一般には「成田道」の名で呼ばれていました。江戸後期に成田不動尊の人気の上がる、参拝客で交通量が増加。江戸からの参拝客の多くは、船橋宿で一泊し、翌朝出発してこの道を通りました。

明治時代には、参拝客が人力車を並べて行く様子が一つの名物となりました。明治30年代になると鉄道で成田へ行くようになったため参拝客は減りましたが、産業道路として栄えました。また、習志野演習場へ向かう軍人が通る道として知られるようになりました。

現在の成田街道も、産業道路として交通量の非常に多い道であり、住宅や店舗が建ち並んでいます。街道の周辺には多くの史跡や文化財が残されています。



[右] 「成田山道」の道標。明治12年成田山の信徒たちによって、東金街道と成田街道が分岐する地点に建てられた
[下] 昭和31年の前原東4丁目付近。自動車の通行はまだ少ない



とうがね 東金街道

徳川家康が東金で鷹狩りをするため、船橋から東金まで一直線の街道の造成を佐倉城主土井利勝に命じました。土井氏は、道沿いにあたる村の人々を動員し、家康の遊猟に間に合わせるため、たいへんな突貫工事で街道を完成させたといわれています。このため、「一夜街道」「権現街道」などと呼ばれたといわれています。

東金遊猟は家光の代まで続き、17年の間に計14回行われました。將軍や大御所がお通りになる御成になるといふことで、御成街道とも呼ばれました。

東金街道の起点については、①船橋大神宮西下 ②西向地藏 ③船橋御殿 ④成田街道との分岐点(前原)という4つの説があります。それぞれに根拠があり、意見の分かれるところです。



[右] 船橋御殿跡・東照宮(本町4)。江戸時代には船橋御殿があり、家康が東金遊猟の際に泊まった。御殿は、4代將軍家綱の時代に廃され、現在は小さな東照宮が建っている
[下] 昭和32年の県立船橋高等学校付近。歩車道の区別がなく、自動車の通行も少ない



千葉街道(国道14号)

東京と千葉を結ぶ最大の一般道ですが、この道が千葉街道と呼ばれるようになったのはそう古い話ではなく、明治6年に千葉県が誕生してから。

明治に入ると人力車が目につくようになり、10年代後半から20年代にかけては東京・成田間、東京・千葉間に乗り合い馬車が開通しました。明治38年、江戸川に江戸川橋が架けられてからは文字通りの大動脈となりました。しかし、明治・大正年間には自動車の通行は少なく、当時は交通の主役はまだ鉄道でした。

現在は市内の千葉街道は、交通渋滞のメッカと言われるほど自動車の交通量が増えました。本中山・西船間の街道沿いには、古い神社や寺が多く残っており、その風景には、古街道の趣が感じられます。



[右] 葛飾神社の池(西船5)。葛飾湧水郡のひとつ。街道から南側への下り坂の一角にある
[下] 昭和29年の船橋橋。橋より河口には建物は少なく、材料置き場等に使用されていた



きおろし 木下街道

江戸時代、江戸から銚子や鹿島方面に向かう人が通ったことから「銚子道」「鹿島道」などと呼ばれていました。貞享4年に松尾芭蕉が『鹿島紀行』の旅で通ったことで知られていますが、残念ながら船橋市域のことを詠んだ句などは残されていません。

また、銚子や霞ヶ浦から江戸までの鮮魚運送に利用したため、「生街道」とも呼ばれていました。

明治42年には、人間が2、3人で押して走らせる人車鉄道が開通。当初は貨物専用で、後に客車も加わりましたが、営業不振のため大正7年に廃止されました。船橋市域の街道沿いは藤原新田・上山新田と呼ばれ、江戸幕府の馬牧から生まれ変わった新田村で、昭和12年の市制施行までは法典村に属していました。



[右] 街道沿いの上山神明宮境内にあるスタジイは船橋の巨木のひとつ
[下] 昭和37年の東武野田線の踏切付近。道はまだ舗装されていなかった。人家が少なく、木立が繁っていた



ぎょうとく 行徳街道

行徳(市川市)と海神を結ぶわずか7キロメートル足らずの行徳街道は、江戸前期、行徳の塩を江戸に運ぶことを目的に行徳・江戸間で発達した水運との関連で整備されました。

江戸後期からは西海神浜でも塩田が営まれ、塩浜と塩焼きの風景がこの街道の名物でした。江戸から成田山や上総・安房方面に向かう際に、日本橋から船で行徳まで来て、この街道を利用する人も多かったため、明治の前半にかけては大いににぎわいました。明治27年に総武鉄道が開通すると、行徳街道を利用する旅人は激減しました。現在は、京葉道路や区画整理の直線道路で寸断され、当時の面影はほとんど残っていません。



[右] 高層マンションの前に残る馬頭観音(海神町西1)。台石に花模様が彫られているのが珍しい
[下] 昭和40年頃の山野町付近。道は舗装されておらず、田園風景もまだ残っている





民話でたどる船橋

船橋の長い歴史の中で、人々の交流から生まれ、言い伝えられてきた民話。

そこからは、当時の地域の特徴や人々の日常生活をうかがい知ることができます。

時代を越えて人々の心にあたたかさを伝えてくれる民話は、永く伝承していきたい郷土の財産です。

今の海老川を大日川と呼んでいたころの話。源氏再興の旗揚げをした源頼朝は、戦に敗れ、安房国に逃れて来ました。ここで、房総各地の豪族の応援を得て力を盛り返し、中央に向かって進軍していました。途中、船橋の地にやって来ると、大日川の河原で休憩することになりました。

頼朝公が来るということで、この土地の豪族は大勢の村人とともに、出迎えました。豪族は、この川で取れた数籠の海老を献上しました。籠の中では、大きな海老がピンピンと勢いよく跳ね回っており、これを見た頼朝公は「これは、元気のいい見事な海老じゃ」と上機嫌でお礼を言いました。そして、市川方面に向かって再び進軍して行きました。

この海老が頼朝公に褒められたことが、きっかけとなり、後に大日川を「海老川」と呼ぶようになったということです。



河川改修や市民の努力によって、海老川はかつての清流を取り戻しつつあります

むかしむかし、全国行脚の旅に出ている弘法大師は、船橋の地にもやって来ました。海神の道を歩いていると道ばたの家で芋を洗っている老女に出会い、少し分けてくれと言ったところ、この老女は無類のけちんぼうで、この芋は石芋で食べられないと嘘を言って、大師に芋をあげませんでした。大師は、その場で何やら祈とうをして、何も食べずに立ち去りました。

その後、老女は芋を食べようとしたが、いくら煮ても柔らかくならず、近くの川に捨ててしまいました。すると、数日後に捨てた芋が芽を出しました。土地の人は驚き、この芋を龍神社の池に移し、祀ったといいます。

これが、ずっと後々まで龍神社の池に生えていた石芋だということです。龍神社の秋祭りは「石芋祭り」と呼ばれ、今でも芋を食べる伝統が守られています。



龍神社（海神6）は、かつて周辺で漁が盛んだったころ、海上の守護神として地元の信仰が厚く、沖ゆく船の目印として灯籠がありました

平将門と腰掛けの松

下総国の岩井郷に本拠を置く平将門は、関東の国々にどんどん攻め入っていました。戦いを繰り返しながら、船橋の地にもやって来ました。

印内村で激しい戦いをし、さらに南下するために峰台下に差し掛かると、大蛇が伏せたような形をした古い松の木を見つけ、その根元にどっかり腰掛け休憩をしました。そこからは、現在の夏見から飯山満にかけての水田が一望でき、「見事なものじゃ」と目の前の景色に満足げだったそうです。

帰り道にもわざわざそこに腰掛けて、またひと休みしたそうです。これを見ていた村人たちはそれ以来この古松を「腰掛けの松」と呼ぶようになりました。

現在中央卸売市場の正門付近にある松の木は、その何代か後のものだということです。



中央卸売市場にある松の木の根元には、平将門の伝説について書かれた石碑が建てられています

徳川家康と大神宮の相撲

徳川家康は鷹狩りがたいそう好きで、船橋から東金まで三日三晩のうちに街道を造らせました。街道が出来上がると、家康公は東金へ向けて江戸城を出発し、途中船橋宿の途中にある御殿に泊まりました。

船橋宿の人々はおもてなしとして、船橋大神宮の境内に土俵を設け、家康公に子ども相撲をお見せすることにしました。試合が始まると、元気な子どもたちは力いっぱい投げ合い、土俵周りの見物人からは声援が飛び、ものすごい盛り上がりを見せました。家康公は「この子ども相撲、実に楽しかった」と満足して御殿に帰っていききました。

今に残る大神宮の相撲は、この子ども相撲が始まりだということです。後に大人相撲が加わるようになり、大神宮の祭礼に相撲は欠かせない行事の一つになりました。



船橋大神宮の相撲大会は毎年10月に行われ、子どもたちのはつらつとした熱戦が繰り広げられます

高根道の贈り物

むかしむかし、高根村（現高根町）に情け深いお殿様がいました。村人たちはこのお殿様をたいそう慕っていました。ある日、お殿様は將軍様にご用があり、江戸のお城に行きました。その日の將軍様は非常に機嫌がよく、用事を申し伝えるとしばらくの間、村の出来事などを中心に雑談をしました。

將軍様は、高根村のお殿様が領地のまつりごとで誠心誠意をもって励んでいることを知り、「高根村のごことで何か望みのものはないか」と言いました。お殿様は、村人たちが難儀していることをいろいろと考え、「高根村から船橋宿へ出るいい道がなく、困っております」と將軍様に申し上げました。すると將軍様は、直ちに家来に命じ、立派な道を作ってくださいました。

これが、今も高根と船橋の中心部を結ぶ高根道ということです。



空気の澄んだ冬には、高根道から船橋市街地方面に富士山を望むことができます